

ランチョンミーティングの紹介—Women in Science in US—*

物質・材料研究機構先進高温材料ユニット構造機能融合材料グループ グループリーダー 御手洗容子

男女共同参画委員会では、金属学会、鉄鋼協会共同で、金属分野で男女ともに活躍できる環境を作るための活動をしている。その一環として、春期・春季大会の昼休みを利用して学生を対象としたランチョンミーティングを行い、金属・材料工学を学び、様々な分野の企業や大学で仕事をする先輩方からキャリアの積み方、プライベートとの両立などについて講演してもらっている。1年経ってしまったが、2014年春期・春季大会でのランチョンミーティングは、第6回目となり、TMS Young Leader として金属学会に参加したDr. Michel Manuel (フロリダ大学) に、アメリカにおける女性研究者の現状を紹介して頂いた。ランチョンミーティングに、海外研究者が参加したのは初めてであり、男女共同参画委員である吉原美智子先生 (横浜国大) が報告した「大型アンケート報告」も英語で行われ、国際的な雰囲気であった。本記事では、Dr. Manuelの講演からアメリカにおける女性研究者の現状について紹介する。

Dr. Manuelは、まず、アメリカの人口構成について説明し、女性の内訳は、男女合わせた人口に対して、白人が32%、アジア系が3%、黒人が6%、ヒスパニックが8%、などであることを示した。次に、1966年から2006年の間に各分野における博士号取得者数のうち女性の割合の推移について示した。心理学が最も多く、2006年では博士号取得者の70%が女性であった。工学分野が最も低く、2006年で女性の博士号取得者は20%だった。次に少ないのが、物理分野と数学・コンピュータ部門で20-30%の間だった。また科学者・エンジニアの内訳は、白人男性が51%で最も多く、次が白人女性の18%、アジア系男性13%、アジア系女性の5%と続き、黒人、ヒスパニックは、男女ともにそれぞれ3%以下となっており、科学分野には、白人、アジア系が多く占めることが示された。アメリカでは、男女の差だけでなく、人種による差があることが伺えた。

次に、世界主要国の取締役や幹部に占める女性割合も示され、アメリカが、取締役が15%、幹部が14%であるのに対し、日本はそれぞれ2%、1%であり、示された10カ国の中で最も少なかった。

非常に興味深かったのは、女性がアカデミックキャリアから外れていく様子を、パイプから漏れ出す水に例えた例である。

図1に示すように、結婚時、キャリアを続けようとする女性は、独身女性より20%少ない。子供が生まれる時にキャリアを続けようとする女性は子供がいない女性より29%少ない。准教授になれる女性は男性よりも23%少なく、教授になれる女性は男性よりも25%少ない。これにより、学生時には50%いた女性は、博士号取得時に37%に減り、助教は24%、准教授は22%、教授は12%とどんどん減少し、National Academyのメンバーになれるのは6%まで減少する。女性の昇進が難しかったり、選ばれなかったりする現実が見える。その理由として、女性はポストドク時に孤立や疎外感を感じる事、キャリアを続けることへの励ましが無いこと、メンターの欠如、育児に関連する問題が挙げられた。一方男性でキャリアを諦めた理由は、昇進できなかったことその他に、給与などが挙げられた。アメリカは日本よりも女性研究者が多いイメージがあったが、アメリカでも女性が孤立している現状があることがわかった。改善策として、女性の昇進をチェックする機能や育児支援などについて多数示された。参加者は、Dr. Manuel自身が育児をしながらキャリアを積み上げていく姿に、大きく励まされた。

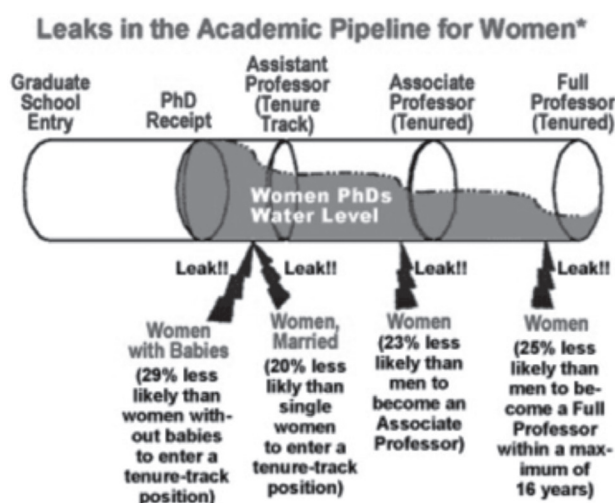


図1 女性がアカデミックキャリアから外れる例え
Source : <http://ucfamilyedge.berkeley.edu/leaks.html>



図2 懇親会でのDr. Manuelと春期・春季大会参加者

*日本金属学会「まてりあ」Vol.54 No.7にも同時掲載

(2015年5月11日受付)